西宮神社十日戎の福男はいかにして生まれたか
—初代福男のライフヒストリーから—

荒川裕紀*

How was “Fuku-Otoko” born?
-From the life history of the first “Lucky Man” of Nishinomiya Shrine-

Hironori Arakawa.

ABSTRACT

Every year on January 10th, the main gate (commonly called the “Great Red Gate”) at Nishinomiya Shrine in Nishinomiya City, Hyogo Prefecture, is opened at 6 AM for visitors to proceed to the main shrine. This event is known as the Tōka-Ebisu “Opening of the Gate” Ceremony. The first three people to arrive at the main shrine are designated Fuku-Otoko (Lucky Men). How did this Fuku-Otoko originate? How has it changed over the years and due to what factors? The present article seeks to answer these questions through an examination of the historical record. From more than 20 years of my research, I found the first “Lucky Man.” Therefore, I would like to show the origin of the "Lucky Man" using not only such contemporary sources as newspapers and the shrine’s daily logs but the life history of the first “Lucky Man.”

KEY WORDS: EBISU, Fuku-Otoko, Shinto, Nishinomiya, Hanshin industrial area, urbanization

１．はじめに

「十日戎開門神事福男選び」とは、毎年１月 10 日に兵庫県西宮神社で開催される神事である。西宮神社の正門である表大門が午前 6 時に開かれると、前日より待ち構えていた参加者たちが一斉に飛び出し、230mの参道を駆け抜け、本殿を目指す。神社は先着 3 名を選び、「福男」として認定する。公式には、鎌倉時代を起源とする神事とされてきた [1]。

当報告者は、1998 年より当神事の調査に関わり、歴史学、人類学、そして社会学的な調査を行ってきた。歴史学的調査では、本神事の核をなす開門競争的な部分に関して大正期から昭和期にかけて発展していったことを新聞資料と社務日記から見出し、そこには改暦と阪神電気鉄道の開通が大きく作用し、新たなイベントを生み出した [2]と結論付けた。さらに太平洋戦争、高度経済成長と経る中で、参加者の増減はあるものの、この行事は維持され続けた。

当論考においては、その開門競争的な盛り上がりを見せ始めた、1937（昭和 12）年から 1940（昭和 15）年の新聞記事と社務日記を提示する。特に 1937 年は、この開門神事にとって、大きな動きがあった。なぜなら、現在確認できる新聞紙上において、はじめて一番福の個人名が掲載された年であり、開門から一番福を取るまでの競争の詳細が報道されているためである。

当報告者はこれまでの調査において、この 1937 年に福男となった人物、田中太一氏を何度か取り上げている。その調査の結果に関しては、様々な媒体で報道され、田中太一氏が初代福男として広く認知されることにも繋がった。本年 2018 年 9 月、当報告者は 20 年

*一般科目

ぶりに遺族を訪問し、田中太一氏のライフヒストリーを改めて聞くことができた。その中で特に感銘を受けたのは、彼の西宮神社に対する信仰の篤さと福男になった以降の動きである。初代の福男がいかにして生まれ、その後何を西宮神社に遺したのか。新しい資料も加えながら論じてみたい。

２．1937（昭和 12）年の十日戎

まず 1937 年から少し時代を遡るが、1920（大正 9）年 1 月 11 日の大阪朝日新聞には、

「今日は即ち本戎で未明から昔ながらの居籠祭と云ふのが行はれ 6 時開門と同時に一丁余も綱になつて押しかけた参拝客が第一の福を授からんものと社前までのマラソン競争いつもの通り幸ひ怪我人のないのが不思議な様なり」

とある。多くの人間が参加していることが分かると同時に、「マラソン競争」との表現から躍動感までが伝わってくる。15 年を経て、1935（昭和 10）年 1 月 11 日の大阪朝日新聞阪神版に、以下の記事が再び現れる。

「午前 6 時の開門には一番鈴の功名を争う人がぎつしりと詰めかけ開門とともに拝殿へ福争ひの競争」

そして、1937（昭和 12）年 1 月 10 日の神戸新聞に「福運へ一番乗だ　“三本の鈴”を覘ふ暁のラッシユ」というタイトルの記事の中で、初めて個人名が登場する。

出船、入船一億トン
港神戸の立體圖
來往支那船の華々しい躍進
神戸税關の昨年の集計
素晴しき動態
福運へ一番乗だ
三本の鈴を覘ふ暁のラッシユ
宵戎
西宮へ人の渦

記事①：1937 年 1 月 10 日神戸新聞阪神版より

「けふの開門は朝の 6 時、門内に備へられた三本の鈴を眞先に鳴らした参詣者のその一年の運勢は大々吉との云ひ慣はしから開門前から福運引當の競争者で黒山の人垣をつくることだらうが昨年は社家町清田八三の長男三郎君がこの先陣を承り今年も第一番にならうとて手具脛（原文ママ）引いて意気込んでゐる、さて霧雨が霽れれば今日の人出は幾十萬に上ることぢやろ」

同日の大阪朝日新聞阪神版には、「鈴を目がけて　もの凄いダッシユ！　一番乗り競争　けふ西宮戎神社の十日戎　朝 6 時に開門す」とのタイトルで、同じく個人名が記載された。

大阪朝日新聞
阪神版
もの凄いダッシユ！
鈴を目がけて
一番乗り競走
けふ西宮戎神社の十日戎
朝六時に開門す
雨にめげぬ
東那合同の合併
特に反對せず

記事②：1937 年 1 月 10 日大阪朝日新聞阪神版より

「初物好きの阪神ッ兒、一番福が転がり込むとあつては、未明から寒さくらゐ何んの、雨が降つても物ともしない意氣も、さこそと思はれる次第、さてけふ誰が一番乗りの鈴にぶらさがるか？　こゝ数年間は西宮市久保町千足材木商店の田中太一さんが、多年の修練と、健脚にものをいはせて、よく諸豪を抑へて一番乗りの覇権を維持してゐたが昨年は家事の都合で缺席、同市社家町清田三郎君に名をなさしめた、ことしはこの兩君も揃つて出場するといふが、そのほかに虎視眈々覇権を狙ふダーク・ホースも多いことゆゑ面白い場面が展開することであらう」

この２紙が、史上初めてこの開門行事で一番乗りした個人名を出し、またその一番乗りの呼称として、「第一番」や「一番鈴」「一番福」の語を与えている。同年 1 月 11 日の大阪朝日新聞阪神版には、「福を狙ふ凄い人並み」として報道されている。

「午前 6 時、大門が開くのを今やおそしと待ちかねた一番福を狙うて大門外にワツショワツショ（注：原文二の字点）と押し寄せた老幼男女が三千人、太鼓の合圖と〻もにドツとばかりになだれこみ、本殿の鈴をめがけて殺到、掃き清めた斎庭に、一番乗り、久保町千足材木店の田中太一さんが、とびこんでからは瞬く間に境内は参詣群で埋まつてしまった」

さらに、「お詣りの一番乗り　16 回の覇権」と題し、

「今年の戎サン一番乗りは誰だらう、一兩日前から市民の興味はこの一點に集注されてゐたが、果然西宮市久保町千足材木店の田中太一さんだつた。終夜大門の内側に屯して護る消防隊 2、30 名と警官 4、5 名が實に手際よく太鼓の音を合圖に重い扉をサツとあけると門外に待機した三千人はワーツと歓聲をあげて境内になだれ込んだ、この最前列の 2、30 人の中からスタートダツシユ物凄く地下足袋に、軽装の男が十数名脱兎の如くとびこんだ、がゴール直前の追い込みをきかせ、今年も最初の鈴を掴んで凱歌をあげたのが彼氏だ『勝つた！！一番だ、一番だ』と高らかに勝名乗りをあげる彼氏は 21 歳の時に西宮へ来てから本年 37 歳まで昨年を除いて 16 回、覇権を獲得、めでたきレコードを樹立した　彼氏一番乗りの哲學は純然たるファインプレーに終始してゐる「慾からではない、達者でお参りできるだけで嬉しい、福は主人の家へ持つて帰るのです、一番に参拝しないとどうも氣分がわるくて・・・」

前年の 1936（昭和 11）年にはこの開門についての言及こそあるものの、個人名は出ておらず、このような躍動感のある実録的な記事は見られなかった。

この年一番福に見事に復帰した田中太一氏であるが、神戸新聞では昨年を除く数年間、大阪朝日新聞では昨年を除いて 16 回と数に開きはあるものの、突如として「長年一番であった人物」が存在したことを報道している。さらに 10 日の記事から、競争をする参加者たちが前日に赤門前に待機していることや、一番を何度も取っている田中さんが走る前の時点で取材の対象者として挙がっていることから、地域では既によく知られた存在であったことが窺える[3]。

当時の時代背景としては、この 1937 年の 7 月には盧溝橋事件が勃発し、徐々に戦時体制へと突入していく訳であるが、阪神間に関しては第二次産業革命期にあたり、例えば神戸新聞との関係が深く、神戸の主要な重工業と言える川崎造船所などは川崎重工業として変革する時期にあたる。記事①に偶然に載っているが、神戸港の輸出入も好調であり、その豊かさもあって、このような開門競争が注目されるような社会的な余裕が生まれたのかもしれない。

３．1938（昭和 13）年の十日戎（西宮・今宮）

この田中氏は、翌 1938（昭和 13 年）年 1 月 11 日の大阪朝日新聞阪神版にも、「善男善女の群　西宮の十日戎　唐門の一番乗は田中、尾松両氏　郊外電車も轉手古舞」と題して報道されている。

「午前 6 時太鼓を合圖に開門すれば、一番福を狙って門前に待機の善男善女三千人がどつとばかりなだれこみ、境内数ヶ所に燃えさかる篝火をたよりに本殿の鈴をめがけて殺到、いつもは閉ざされている唐門もサツと左右に開いて一番乗りを迎へ入れる。16 年間一番乗りの覇権を維持する西宮市久保町千足材木店の田中太一さんと丹波氷上郡春日部村の尾松新之助さんの二人が同時に掃き清めた斎庭にとびこんで目出度く凱歌をあげ」

同日の神戸新聞阪神版では

「午前 6 時の開門と同時に数百の参詣人が例によつて神前への一番乗りを争ったが　2、3、4 年続けてゐる西宮市久保町の千足材木店の田中太一さんと、氷上郡春日六（原文ママ）村尾松新之助さんの二人が同時にさつと神前の鈴の綱にとびついて結局二人が一番詣りと極つた、名物の吉兆にまで『武運長久―皇軍萬歳』などの紙片が吊され例年とは變つた軍國調を現はしてゐる」

とある。西宮神社の社務日記（昭和 13 年 1 月 10 日付）にも「先登第一ハ例ノ千足材木店田中太一」と個人名が明記されている。この新聞から分かるように、同時一番福という裁定を神社が下すこととなったのである。このことが契機となり、一番参りに関して信心という事項以外の「足の速さ」という側面がより重要となってきたことが考えられるのではないか。その後の報道では、実際足の速さに関する記事が増加する。

さらに、神戸新聞の記事の最後でも吉兆に『武運長久―皇軍万歳』の紙片が付けられたところから分かるように、戦争に突入した時局が良く表れている。

当時の記事で興味深いのは、十日戎全体に関する記事である。1 月 10 日の大阪毎日新聞阪神版では、「事變色の宵戎！」とのタイトルで、縁起物について言及

している（記事③）。

「『商売繁盛笹持つて來い』の商い神の戎さんも『鉄砲持つて来來い』の戦争に影響されて、華やかな初春の祭禮も事變色がにじみ込んで随所に軍國調を奏でてゐる、その二三を拾えば―今宮戎の拝殿には大旆に『祈皇軍武運長久』と記されてあるのも心強く、堀川戎神社では社司の令息の『祝入営』の長旗が翻つてゐるのも勇ましい　露店商人もぬからず縁起物を時局に因んで、『福髭』は『皇軍大捷部隊長髭』『福俵』は『俵ころころ（注：原文二の字点）南京入城』『竹梯子』は『敵前上陸戦勝はしご』となりその他『武運長久吉兆』などと名をつけて呼び立て、それがまた参詣者の人気に投じて面白いほどの売行を見せ赤襷に赤鉢巻の商人たちが戎顔を見せてゐた」

記事③：1938 年 1 月 10 日大阪毎日新聞阪神版より

現在でも、縁日の露店で売っているものは、時世を反映していることが多いが、当時の露店商が部隊長付け髭を縁起物として売っているところに時局が感じられる。1937 年 7 月の盧溝橋事件が拡大した中国戦線は、11 月には当時の中華民国の首都南京への攻防戦に拡大し、年末に南京が陥落。翌 1938 年 1 月の十日戎の頃は、南京入場を含めた戦局報道が、一番盛り上がっている時期だと推測される。前日 1 月 10 日の大阪朝日新聞阪神版では、出征した宝塚警察署の巡査の「勇ましい勲功だより」について報じているが、そのタイトルが、「南京一番乗りの偉業」である。

そういった軍事的なものへの希求が、西宮神社の門開けの競争の部分に大きく影響したのではないだろうか。同じ 1 月 10 日の大阪毎日新聞の記事の中で（記事③）、西宮神社の十日戎に関しては、「西宮神社も物凄い参詣者群」とのタイトルで、以下の記載がある。

「西宮戎の前触れ 9 日の宵戎は物凄いばかりの参詣者群のラツシユを見せ戎景気にもまさに戦捷の春がはつきり出てゐた　今年は日曜日といふので出足が意外に早く朝のうちから参詣者が押し出し午後 4 時ごろには甲子園で開かれた本社主催のスキージャンプ大會に集つた観衆が雪崩を打つたためこの日午後 5 時までの参詣者数は十数万と数えられ同神社の宵祭りとしては空前の人出であった」

大阪毎日新聞と阪神電鉄が一緒になって、甲子園でスキーのジャンプ競技を行うといった大イベントを十日戎の時期に合わせ、結果的に阪神間を大きく盛り上げていたことは興味深い（記事④）。

記事④：1938 年 1 月 10 日大阪毎日新聞阪神版より

阪神・阪急による学園誘致などもあり、総じて阪神間には若さや健全を前面に押し出すイベントが多かった。当時の阪神間の作られた気風が、この開門競争にも影響したのではないか。

４．1939 年以降、本格的な開門競争へ

1938（昭和 13）年の「同時一番福」の出来事もあり、自身の体調不良もあったために、田中氏は翌 1939（昭和 14）年には対策を練って出場したようである。

大阪朝日新聞 阪神版

福の神へ波うつ人出

沸返つた西宮本戎

一番乘は健脚兄弟

病後で王座を譲つた田中さん

名譽の職死

加賀一夫一等兵

營門で老父

記事⑤：1939 年 1 月 11 日大阪朝日新聞阪神版より

1 月 11 日の大阪朝日新聞阪神版の記事（記事⑤）では、「一番乘は健脚兄弟　病後で王座を譲った田中さん」とのタイトルで、以下のように書かれている。

「“今年は誰か”と街の興味を集めてゐた戎さんの一番乘りは過去 18 年間のレコードホルダー西宮市久保町千足材木店の番頭田中太一さん（39 年）がつひに王座を譲つて友弟の同市石在町 71 田口商店員多司馬玖一君（25 年）に凱歌があがり、二番乘りは玖一君の實兄千足材木店員園之助君（29 年）で田中さんは惜しくも三位となつた、田中さんは数日前から不快で出場が気遣はれていたが颯爽たる青年団服を着て知人の前記多司馬兄弟を介添役にして出場、午前 1 時頃から大門前にひしめきあふ人の群に加わつて待つうち午前 6 時、内側から消防組 2、30 人が太鼓の音を合図にサツと重い扉をあけると忽ちワーツと喊声をあげて決河の勢ひで突撃だスタートダツシユ物凄く韋駄天走りの十数名のうちさすがは田中さんだ、トツプを切つて進んだが、二町あまりの境内を走るうちやや疲労の態、これを見た親友多司馬君兄弟“覇権を他に渡してなるものか”とラスト・ヘビーをかけ、つひに最初の鈴を摑んで凱歌をあげ一番乘りの玖一君はご褒美の大鏡餅をいただいた。『田中さんが病気で身體が衰弱してゐるといふので手助けに出たまでですが田中さんが危なくなつたのでやむを得ずみんなを出し抜いたわけです、決して田中さんのレコードを打ち破るつもりでは毛頭ありません』と交々かたる多司馬君兄弟はいづれも同市用海小學校時代ランニングの選手で鳴らした健脚家、一番乘りの弟玖一君は同市石在町田口樽丸商店に勤め、二番乘りの兄園之助君は田中さんと同じ千足材木店に勤める眞面目な青年、園之助君はすぐる上海事變に出動した工兵上等兵で現在郷軍西宮中央分會の役員をしてゐる、病後の疲労から 19 年目にをしくも覇権を逸した田中さんは『病気のあとで身體が弱つてゐたので一番乘りは難かしいと思つてゐました、せつかく私が永年持ちつゞけてきた一番乘りをせめては仲間のものにでも譲りたいと平素昵懇にしてゐる多司馬兄弟に出て貰つたわけで仲間のものが一番乘り出来てこんなに結構なことはありません』と満足げに語つた」

この福男競走は、特にこの昭和 14（1939）年に当時の大阪朝日、大阪毎日（記事⑥）[4]、さらに神戸新聞において大きく紙面を割かれており、注目度の高さがうかがえる。昨年度の「同時一番福」、さらに自身の体調不良もあり、同僚・友人でありランニングの選手であった多司馬氏兄弟に任せた訳である。この結果、一番に走りに注目させる行事へと変質していったのではないか。

福男に新人現はる……

—連福十八年の田中さんは三番—

山室光子さん

を圍んで

宮眞武明

記事⑥：1939 年 1 月 11 日大阪毎日新聞阪神版より

記事⑦：1940 年 1 月 11 日大阪朝日新聞阪神版より

さらに 1940（昭和 15）年 1 月 11 日の大阪朝日新聞の記事（記事⑦）のタイトルでは、「兄の激励と友情に答へて」とある。

「“今年の一番福は誰に”と話題になってゐた西宮の十日戎の一番参りはつひに昨年の覇者西宮市石在町 70 田口樽丸商店店員多司馬玖一君（26 年）が連続覇権を握ったがその殊勲の裏に戦線から弟を励ます兄勇士の熱烈な眞情と先輩の深い友情が秘められてゐる、昨年の総覇戦には玖一君は實兄の同市東町 3 丁目 63 多司馬園之助氏ともに出場、つひに玖一君が一等に、園之助氏が二等といふ揃ひも揃つた健脚ぶりに「兄弟福男」の名を輝かしたものだ、ところが園之助氏は昨年 8 月名誉の召集を受けて中支戦線に出征、上等兵として活躍してゐるが戦線にあっても常に十日戎一番乗りのことを気にかけ舊臘十日占領した敵陣地の前で戦友達と一しよに撮影した寫眞に添へて“輝かしい興亜新春の一番乗りはきつとお前ががんばつてくれ”との手紙を航空便で送ってきた、しかもその激励の軍信を玖一君はあたかも宵祭の九日手にして“兄が敵陣を占領したあの気持でかならずやらう”とかたく決意した、この軍国兄弟の氣持に感激したのが 18 年間連覇のレコードを持つ同市久保町千足材木店の番頭で園之助上等兵と昵懇な友人田中太一氏（40 年）で玖一君の介添役として出場することになりこの朝 4 時ランニングシヤツに日の丸の鉢巻をしめた玖一君は兄勇士の手紙と寫眞をしつかと内壊に秘めて 6 時の開門と同時に決勝の意氣物凄くサツと飛び込んだ、最初のダツシユは数人が団子になって暁闇の中を走つたが南宮神社附近から早くも玖一君はトツプを切つた後から“多司馬君頑張れ”と声援を続けるのは田中氏だ、つひに多司馬君は目出度く凱歌をあげた、本殿の鈴縄にすがりついた玖一君は“兄さんやりましたよ”と思はず感激の叫びをあげ、吉井社司から高々と一番名乗りを受け晴れのご褒美として御供米や、お箸と兄勇士のお守札を戴いた“今年は大層寒かつたが戦線の兄のことを思へばなんの寒いくらゐと一生懸命でした、早速お守りと一緒にこのことをいつて兄を安心させたいと思ひます　と改めてお禮詣に参拝した玖一君は歓びを語つた」

記事⑧：1940 年 1 月 11 日大阪毎日新聞阪神版より

大阪毎日新聞の記事（記事⑧）では「福男は勇士の弟だ！」という題も付けられており、戦時色が濃くなってきているのが読み取れる。武運長久を祈り出した十日戎に、阪神間の特徴でもある、「健康・健全なる郊外」が融合する形で、走りを主にした開門競争が 1938 年から徐々に報道をされていた。その流れが、園之助氏の出征とその手紙を懐に入れて「ランニングシヤツに日の丸の鉢巻きをしめ」て走った玖一氏が走り一番福を連覇したことによって大いに盛り上がったわけである。

さらに「18 年間連覇」[5]のレコードを持ち、昨年度には「颯爽たる青年団服」を着て出場し、結果として多司馬君に王座を譲り渡した田中太一氏が、今回は開門と同時に「多司馬君頑張れ」と声援を送ることによって、福男の正統を彼に託したとも考えられる。

この後、戦時状況の悪化に伴う紙面の縮小とともに小さくなっていくものの、1945（昭和 20）年まで開門の記事はおおむね存在する。しかし、大阪朝日新聞において特に大きく報道されているのは、特にこの 1939（昭和 14）年から 1940（昭和 15）年にかけてである。

3 紙ともに、戦線の拡大とともに軍国調の用語が付与されていくことが分かる。「争奪戦」、「勇士」、といったものが、一番福、一番詣りという語に付随している。それと同時に、「トライ」、「スクラム」、「タックル」、「レース」などの体育用語が多用されるようになっているところから、特に昭和 10 年代からは、スポーツ的な足の速さにかなり注目が集まっていることが、ここからも読み取れる。これらの背景には、当時西宮が、川西航空機などの工場をはじめとした阪神工業地帯の中心地として発展し、多くの若年人口が存在するようになったことがあるだろう。さらに、紀元二千六百年による日本文化の再評価がなされたことやその記念大会として企画された東京オリンピックは返上したものの、それ以外の体育大会などは多く開催されたことによって、社会の体育的な行事、「日本的な伝統行事」への注目度が比較的高かったことが推察される。

次項においては、この走りに着目された行事として大きく報道されるようになったきっかけともいえる田中太一氏について、西宮神社に遺した足跡をご家族へのインタビューを中心として辿ってみたい。

５.「初代福男」田中太一氏のライフヒストリー

写真①：1940 年前後の田中太一氏
（後列左 2 番目、田中光子氏提供））

前項までの記事の提示によっても明らかな通り、新聞報道によって、開門競争で一躍有名になったのが田中太一氏であることを、当報告者は 2001 年からの諸論考によって明らかにしてきた[6]。

記事からも分かるように、彼は十数回も一番福になったものの、1938 年に彼の出身とも近い丹波地方の春日部村からの挑戦者によって「同時一番福」の判定が下されることとなった。そのため、実際に更に足の速い同僚とその弟を走らせ、福男を獲得させることによって、現在まで続く、「走りがまず注目される」開門神事の原点となった。

その原点を作りだした田中太一氏。1997 年に彼のご遺族にお会いして話を聞いた時、彼が福男になるまでの経緯と更に福男に連覇した後の人生について、それらが如何にえびす信仰に根差したものであったのかを聞くことが出来た。2018 年の今年、田中太一氏の長女光子との改めてのインタビュー内容や新たに見出した新聞資料から、補足する形で以下に記したい。

彼は、1901（明治 34）年 8 月 26 日、味間村（旧味間新村、現篠山市）にて出生。現地の高等小学校を卒業し、西宮市の旧家であり、当時は久保町に在していた千足家の材木店に就職。当時の新聞紙上では「21 歳の時に西宮へ来て」とあるが、実際にはもう少し早くに奉公をはじめ、材木屋での修行に励んでいたとのことである。勤勉に働いたこともあり、福男競走で報道される頃には番頭にもなり、家庭を持った。

新聞では 18 年間のレコードホルダーと称されていたが、実際は十日戎の時だけでなく、毎日西宮神社に参拝をしていたようである。足が速かったこともあるだろうが、その西宮神社に対するひたむきさから、地元出身でないのに関わらず地域社会に認められ、「一番福」を長年取り続けられたのでないだろうか。

昭和 50 年 1 月 13 日にはサンケイ新聞にて、「昭和のロマン②えべっさん」という題にて次のように報じられている。

「昭和 14 年 1 月 10 日。朝 6 時前。冬の空はまだ明けていない。本戎が間もなく始まる西宮神社（西宮市社家町）の赤門前。一群の参拝客が集まっている。寒気が身にしみる。はく息が白い。参詣者たちの押す力で、門がギシギシときしむ。午前 6 時。合図の大太鼓が「ドン」。門の内側からカンヌキがはずされた。『ウォーッ』―。歓声をあげて、いっせいに境内に躍り込む。走る。走る。本殿まで 180 メートル。参道を、松明の火が照らす。地を響かせてかける。見事に一番乗りして、本殿の鈴の緒を掴んだものが、この年の『福男』。なにごとにもよらず一番にこしたことはない。そんな人間感情が生んだ、えべっさんの恒例行事。起源はだれも知らない。20 秒足らずで争いは終わった。　この年の福男は、明治 34 年生まれ、37 歳の田中太一さんだった。厚手に麻裏草履小

柄なからだ。脚力は飛び抜けていた。丹波出身。当時、西宮市久保町の材木店で修業中だった。田中さんは、これで15年間連続して福男になった。『ホンマに早い男やな』ー。福を逃した参拝客から羨望のため息がもれた。翌年、田中さんは病気で走れなかった。しかし、この記録は今も破られていない。

“福男”は、昭和20年、西宮神社のすぐそばに材木店『田中商店』＝社家町1－3＝を開いた。商売繁盛。田中さんは一人娘の光子さん（31）と夫の宗明さん（41）に店をまかせて、のんびり隠居暮らし。二人の孫のお守りをするかたわら、趣味のキクづくりに励んでいる。　昭和50年の西宮えびすも、40万人を超す参拝客でにぎわった。

『お蔭さまで、達者に暮らしています。えべっさんとは、よほど因縁があるのですやろ。毎朝のお参りを欠かしたことはおません。今でも福男選びを見ると、つい走りたくなりますが、もう年ですから、ケガでもしたら大変。あのころは本当に若かったですからなア』田中さんは福々しい笑顔で、遠い日を懐かしんでいた。」

新聞資料・社務日記などと対照させると、年代や年齢（満年齢と数え年）など異なるところもある。当報告者が調査し、収集した資料からでは、病気で欠席したのが1936（昭和11）年で、病気後のため、同僚・友人の多司馬兄弟と一緒に走ったのが1939（昭和14）年である。もっとも昭和10年代の新聞でも、覇権の回数が少しずつ異なることもあるので、どちらが正しいとは言えないが、昭和50年の段階で福男の初代ともいえる人へのインタビュー記録が残っていること自体が貴重である。娘さんの光子氏からも「小柄で小回りの効く体型で足は速かった」ということをお聞きした。

福男として報道され始めて、今津洲島町に家を構え、戦後染殿町、更に一時期は魚崎に居住することもあったが、そのころにも十日戎には娘の夫となる宗明氏を連れて参拝していたとのことである。

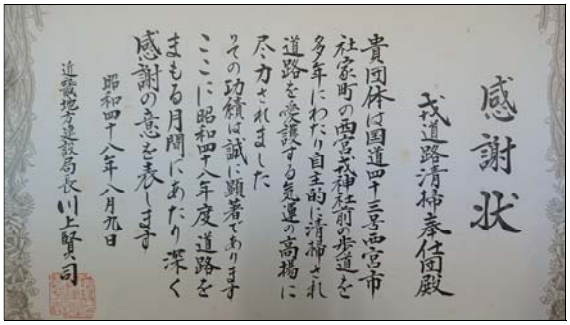
1954（昭和29）年は、西宮神社のある西宮市社家町に転居。その地にて、製材業を開業。神社に隣接していることもあり、そこから西宮神社にも関係する様々な活動に乗り出した。折しも、前年の1953（昭和28）年に南門が復興し、正式に神社が福男を選ぶ、開門競争が再開された時期である。

新聞にもあるように、菊を育てていたが、その菊好きが高じて、1977（昭和52）年、西宮菊花協会の設立メンバーとなった。第1回から「西宮菊花展覧会」として西宮神社の境内で大々的に行うようになった。なお、第1回では田中太一氏は、1939（昭和14）年に史上初めて開門神事での勝者に対し「福男」という用語で報道した毎日新聞社（旧大阪毎日新聞社）から、「毎日新聞社賞」が贈られている。

写真②：西宮神社での田中太一氏（田中光子氏提供）

さらには、氏子青年会（若戎会）の活動や老人会にも積極的に参加した。信仰に関しては、毎日の西宮神社参拝、甲山大師やご主人であった千足氏の命日には必ず満池谷墓地の墓に詣で、千足家からも感謝されていたとのことである。

その信仰心、西宮神社に対する奉仕の気持ちはさらに深まり、毎日西宮神社前の歩道を自主的に清掃も行ったために、建設省近畿地方建設局から表彰を受けたこともあった（写真③）。



写真③：建設省からの感謝状（田中光子氏提供）

自身の製材業から引退後のこれら氏子青年会や菊花協会、老人会などの組織運営などの活躍には目を見張るものがあり、まさに彼の言い方を借りると、「えべっさんとは、因縁がある」人生だったといえるだろう。

現在でも、彼の事績を目にすることができる。それは桜である。店舗兼住宅が西宮神社に隣接していたこともあり、1957（昭和 32）年より桜の植樹を始め、大きく育つと境内に移植をしたのである（写真④）。1967（昭和 42）年には孫に恵まれたが、孫の年齢に合わせて、神社内の池に鯉も放っていた。

写真④：田中氏と境内に移植した桜（田中光子氏提供）

神社の神苑整備計画によって切られてしまった桜もあるが、境内や様々なところで咲いている桜が今でも見受けられる。彼は、1991（平成 3）年 8 月 23 日に老衰にて亡くなられた。様々な活動を行い、頻繁に体を動かしていた賜物であるといえるだろうが、彼は命を長らえたのも、「えべっさんのおかげ」と語っていたとのことである。

このように、まさに彼の人生の大半が、西宮神社とともにあったと言えるだろう。

６．結語・謝辞

新暦への改暦と、電鉄会社による祭礼の創出の過程で、偶発的に生まれてきた開門競争であるが、大阪・神戸の郊外である「阪神間」のキーワードとしての「健康や体育」に戦時の時局背景が重層的に加わることによって、この行事は隆盛した。その過程で田中氏のような地方からの新住民が祭礼・信仰的な部分も認めながら参加し、新出の行事ながらも「伝統性」を彼らなりに感じていた。多司馬氏が一番福となった 1940（昭和 15）年は神武紀元二千六百年であることから、日本全国で様々な行事が企画されていた。日本の伝統性などに社会が着目していた背景が、この競争に関してもそのように見る動きも出ていたのではないだろうか。その中で、「伝統を受け継いできた」田中氏が、若い「勇士の弟」を応援し、結果として彼が福男になったことを考えると興味深い。各地域の信仰が国家の伝統へと繋がっていく過程の中で、この開門競争が、新しく生まれた行事ながらも独自の「伝統性」をもって盛り上がっていったというのはエリック・ホブズボウムの『創られた伝統』論 [7]の中で改めて語ることができるのではないだろうか。その意味でも、田中氏の西宮神社で果たした役割は大きい。

更に今回の資料収集において、興味深いことを見つけ出した。それは前項で挙げた、昭和 50 年のサンケイ新聞の記事で、田中氏の発言中、「福男競争」ではなく、「福男選び」の語が使われていることである。

このインタビューの約 10 年前、1966（昭和 41）年から 3 年間は、門前の混乱からその数年前より兵庫県警からの要望もあって、福男競争の中止があった。具体的には、神社として門は開けるものの、一番に拝殿に到達した参拝客を福男としないことが定められた。

そのため、この 1960 年代後半から 1970 年代前半は、新聞報道もされない年が出るなど、福男競争にとっては暗黒期であった。しかし同時期に、兵庫県北部香住からの漁業関係者の多くが講を結成し、10 日早朝よりの参拝を行う中で、この福男競争にも積極的に参加したことにより、1975（昭和 50）年に辺りから少しずつ新聞報道も復活するようになった時期であった。

当報告者は、それまでの競争的な部分に、講を結成し早朝より昇殿参拝を行う、信仰心の篤い漁業関係者が加わったことによって、この行事の意味が変化したのではということを、2013 年の論考 [8] にて指摘した。

実際に、新聞紙上で「福男競争」ではなく「福男選び」の語句が使用されるようになるのは、平成元年以降だが、このインタビューで時代を先取りする形で、彼が「福男選び」を使っているのはなぜだろうか。

もちろん彼は、「厚手に麻裏草履小柄なからだ。脚力は飛び抜けていた」人物で、その篤い信仰心も相まって、地域で認知されていたからこそ一番福になり続けていたのだろう。しかし、彼の中で「ただの競争ではなく、一番福として選ばれる」感覚があったのではないか。

当報告者は 2014 年の論考 [9] の中で、平成以降に神社側から付与された用語であった「開門神事福男選び」が「福男競争」に取って代わり定着した理由を、マスメディアと神社からの発信とともに、参加者自身に「選ばれる感覚」があるからだということを、自らの参与観察も含めて指摘していた。初代の福男、田中太一氏の福男になった後の人生は、まさに西宮神社とともにあった。自らが選んだ道でもあろう。しかし 20 代からこの競争に参加する中で、えびす様から選ばれる [10] 感覚が生まれ、その後の西宮神社における活躍へとつながっていったのではないだろうか。

創られた神事であるとはいえ、そこに篤い信仰心をもって参加した、初代の福男がいた。その事実が、一過性のイベントに終始せずに、現在まで続き、更には6000人もの参加者を日本全国から集める神事へと変容した見えない原動力となっているのではないだろうか。幸いにも、「太一桜」は4月には咲き誇る。目に見える形で、「選ばれた福男」の事績を感じることができるのである。現在、参加者を集めて開門神事の流れを説明する場所が、偶然にも桜のある写真⑤の辺りである。

写真⑤：「太一桜」（田中光子氏撮影）

現在、当報告者は調査を行う一方、十日戎開門神事講社の理事として、本校の学生たちとともにこの祭礼の執行に奉仕している。当報告者にとってもライフワークであるが、是非この開門神事に興味を持つ人々に初代福男の生き方をこれ以降も伝えていきたい。

今回の論考を執筆するにあたり、田中太一氏の長女、光子氏にはインタビューや資料提供で大変にお世話になった。いつもながら、情報提供で西宮神社にも大変お世話になっている。この場を借りて、改めて御礼申し上げたい。

参考文献・注

1) 西宮神社編『西宮神社の歴史』1985、学生社

2) 荒川裕紀「十日戎開門神事の歴史的変遷」『北九州工業高等専門学校研究報告』第43号、2010、p.105-114

3) 1939年1月11日の大阪朝日新聞の記事で「颯爽たる青年団服を着て」とある。ご遺族からはその当時の田中氏の活動については分からないと話されたが、氏が青年団員であった可能性は高い。昭和40年代の記事で当時は消防団が開門を担当していたとする記事も散見され、氏がある程度神社祭礼の奉仕に関わっていたことも考えられる。インタビューにあるように信心深く、参拝も毎日欠かさない人物であり、もちろん「足も速かった」ために一番福であり続けたのではないか。

4) 1939年1月11日の大阪毎日新聞の記事で「福男」という語句が史上初めて登場。新聞紙上で概ね定着をするのは1950年代であるが、1940年でも大阪毎日のみが「福男は勇士の弟だ」とのタイトル以下「福男」を呼称として使用している。

5) 1938（昭和13）年の「同時一番福」が田中氏にとっては最後の一番福となる。その際の大阪朝日新聞の記事には「16年間一番乗りの覇権を維持する」とあり、前年1937（昭和12）年の一番を獲得した際の報道では「21歳の時に西宮へ来てから本年37歳まで（家事の都合で欠席した）昨年を除いて16回、覇権を獲得」とあるので、一番福は17回であると推測される。1939（昭和14）年の記事で「19年目におしくも覇権を逸した田中さん」と書かれており、記者が1936（昭和11）年の田中氏の欠席を知らなかった可能性もある。厳密には「1939（昭和14）年までに18回参加して、17回一番福となり、1回三番福となった」が正しいのではないか。いずれにせよ、現在まで続く福男選びの中ではパイオニアであり、最多レコードホルダーであることは確かであろう。

6) 初出は、荒川裕紀「十日戎開門神事考」『―えびす信仰研究会報告―えびす信仰の謎をめぐって』2001、えびす信仰研究会、p.35－70

7) エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編『創られた伝統』1992、紀ノ國屋書店

8) 荒川裕紀「十日戎開門「神事」の創造－「門開け」から「神事」へ　高度経済成長以降の日本文化のあり方に関する一考察－」『北九州工業高等専門学校研究報告』第46号、2013、p.57－66

9) 荒川裕紀「昭和晩期以降における十日戎開門神事の変遷 －新聞資料 、インタビュー、参与観察 を通じて―」『北九州工業高等専門学校研究報告』第47号、2014、p.71－80

10) 西宮神社と田中家の関係は現在でも続いている。2012年9月、西宮神社の例大祭「西宮まつり」では、渡御祭で1名選ばれる「童男」に田中太一氏の曾孫が選ばれ、見事に大役を務めた。